令和８（２０２６）年度　第２回かしわざきこども大学運営協議会　議事録

＊　日　　時　　令和８（２０２６）年９月２９日（火）　午後６時００分～午後７時３０分
＊　会　　場　　柏崎市役所　１階　多目的室
＊　出席委員　　６名：岸勝巳委員、片桐秀樹委員、蓮池純夫委員、岡村美奈子委員、川本浩子委員、滝澤里佳委員
＊　欠席委員　　２名：三井田正志委員、土田由紀委員
＊　事 務 局　　４名：山之内知行課長、牧口歩係長、伊藤貴史副主幹、横田則子主査

１　開会　　司会：事務局

２　挨拶　　岸会長

１０月は神無月であり、よろずの神様が出雲大社に集まり、来年の神事について話し合うと言われている。今日の第２回運営協議会でも神事と同じように、来年度の事業について話し合うことになっている。

ＡＩを使って第１回運営協議会の議事録を要約すると、「①令和７（２０２５）年度の事業報告と決算報告をした。②多彩なコースの運営について説明があり、寄附金、基金の維持が課題である。③次年度の事業展開と資金の確保が重要課題である」とまとめられた。

第１回の運営協議会での協議も踏まえながら、かしわざきこども大学の事業が実りあるものになるように、各委員の立場から、多くの意見をいただきたい。

３　報告　　進行：岸会長

⑴ 令和８（２０２６）年度　事業実施状況について

ア　「自然体験コース」　　【事務局】　資料１－１、１－２

今年度、当初の予定どおり事業を実施している。これまでに申し込みがあった２８園中２４園が実施済み、３２６人の園児が参加。各園からは、実施後に活動報告書を提出してもらうことになっており、今回は５つの園の報告書を抜粋して会議資料とした。どの体験活動についても、「普段の園生活の中だけでは体験できない活動メニューとなっており、楽しく貴重な経験ができた。」というような感想が寄せられた。

イ　「エネルギーのまち、柏崎探求コース」　【事務局】　当日配布資料

１０月３日（土）８時４５分～１２時で実施予定。市役所で開講式を行った後、９時頃バスで出発し、（株）INPEX 柏崎水素パークの見学を予定。親子１５組の応募があり、募集を期日前に締め切った。その後、１組のキャンセルがあったため、　親子１４組計２８人の参加予定。（※会議後修正。当日参加は、親子１２組計２４人。）

ウ　「ものづくりのまち柏崎・歴史探求コース」【事務局】　当日配布資料

１１月２１日（土）に、鋳物砂・鋳型製造、バナナの生産などを手掛けるシモダ産業株式会社（松波）、新潟県無形文化財認定蝋型鋳金の原惣右エ門工房（大久保）を見学し、柏崎のものづくりやその歴史を学ぶ。博物館の学芸員に解説いただき、柏崎に伝わる鋳物（いもの）技術についてのあゆみを学ぶ内容を計画している。

また、１２月１９日（土）には、「国際交流コース～クリスマスのつどい～」を計画している。

－質疑・応答－

【委員】　「ものづくりのまち柏崎・歴史探求コース」は対象が小学校４年生～６年生であり、「エネルギーのまち、柏崎探求コース」は、小学校３年生～６年生である。違いは何か。

【事務局】　「エネルギーのまち、柏崎探求コース」は、理科・社会の学習が始まる小学校３年生からとしている。「ものづくりのまち柏崎・歴史探求コース」は、産業の歴史についても含まれるため、小学校４年生～６年生を対象としている。

【委員】　各事業に委員も参加することは可能か。

【事務局】　「エネルギーのまち、柏崎探求コース」については、受入施設の都合により、人数の余裕がないため、参加は難しい。

「ものづくりのまち柏崎・歴史探求コース」「国際交流コース～クリスマスのつどい～」は、参加可能である。

⑵ 令和８（２０２６）年度　かしわざき子ども育成基金　収支報告　【事務局】　資料３

毎月、東芝エネルギーシステムズ（株）、東芝プラントシステム（株）から自動販売機の売り上げの一部を寄附いただいている。８月末現在合計１９１，７６０円である。

第１回運営協議会で寄附金収入確保に向けてご意見いただいた内容について、関係課に確認した内容等、現在の進捗状況を以下のとおり報告。

① ふるさと応援基金から、かしわざきこども大学の事業への充当について。

財政管理課担当係長と協議。ふるさと応援基金が充てられている事業は、ふるさと納税の目的ごとに（「子どもたちのために」「人と自然に優しいエネルギーのまちづくりのために」「市長におまかせ」など）、市長が選択し、決定している。主に特定の財源がない事業を対象とし、「かしわざき子ども育成基金」を原資にしている「かしわざきこども大学」は対象になるのが難しいとの回答であった。

② 市の公式ホームページに事業内容について動画で紹介することについて。

元気発信課に確認。市のホームページ上に添付するファイルのデータ量が決められており、動画をアップロードすることは難しいとの回答があった。市の公式 YouTube に動画をアップロードし、そのリンクをホームページに張り付ける対応は可能。いずれにしても、撮影不可の児童、保護者が映らないように配慮することが必要であり、また、動画を見栄えのするものに編集することが必要である。「かしわざきこども大学」としては、取り組んだことがないことのため、手法について研究する必要があると考えている。

現在の公式ホームページ上の「かしわざきこども大学」の紹介ページについては、分かりやすく、見て楽しいものになるよう編集していきたい。

③ 寄附金の募集の働きかけについて

チラシを作成し、１０月以降、商工会議所・柏崎市内の企業に何社か直接出向いて依頼する予定。第３回の会議で、寄附金の募集活動について報告する。

－質疑・応答－

【委員】　「自然体験コース」で園児たちの写真が提供されているので活用するのはどうか。写真だけでなく、文字も一緒に載せることでＡＩが検索するのに拾ってくれるため、文字情報も載せるようにしてもらいたい。

４　議事　令和９（２０２７）年度　実施予定事業概要（案）について【事務局】…資料２

ア　「自然体験コース」

プログラム負担金、バス借上げ料について令和８（２０２６）年度の額で据え置きとした。予算(案)のバス借上げ料では、例年通りの日程で各園が利用した場合の額で計上したが、実施にあたっては受入施設側と協議し、バスの運行日を設定するなど、バスの台数をなるべく削減することで考えている。

イ　「科学体験教室（仮）」

令和９（２０２７）年度廃止。これまで新潟工科大学と協働で、「ドローンプログラミング」や「３DCAD 体験教室」を実施してきた。

子どもたち向けの科学実験やスライムづくりなどを体験できるイベントとして、教育センター科学班が主催している「科学のえんま市」があり、対象も重複していることから、廃止としたい。

ウ　「国際交流コース」

「英検２次試験対策講座」と、「クリスマスのつどい」を内容としている。予算上は、アルフォーレの借り上げ料のみを計上。

エ　「エネルギーのまち、柏崎探求コース」

来年度も環境課と連携して事業を実施する予定である。見学先については、これから協議する。講師謝礼、バス借上料、消耗品費を計上している。

オ　「ものづくりのまち柏崎・歴史探求コース」

来年度についても、柏崎が持つ資源を生かし、工場や工房の見学などを実施したいと考えている。

なお、エ「エネルギーのまち、柏崎探求コース」、オ「ものづくりのまち柏崎・歴史探求コース」では、バス借上料を廃止し、庁用車マイクロバスの利用を考えている。

カ　「学校教育活動推進事業」

学校統合による学級数の減少を考慮し、１１５,０００円を減額した1,８８５,０００円をかしわざき子ども育成基金から支出する予定である。

キ　「運営協議会」

来年度の運営協議会の開催について、年３回の開催として委員８人分の予算を計上。

令和９（２０２７）年度予算　　計３，６９８，０００円

ク　「かしわざき子ども育成基金の残高について」　【事務局】　　当日配付資料

今年度、仮に年間５０万円の寄附収入があり、４，０３２，０００円の予算を全て執行した場合、基金残高は２１，３７５，６００円となる。また、令和９（２０２７）年度以降、年間５０万円の寄附収入が継続し、計３，６９８，０００円の事業を実施した場合、令和１４（２０３２）年度までは、事業が継続できる見込み。

－質疑・応答－

【委員】　かしわざきこども大学は平成１９（２００７）年度に開設されたが、プログラムの内容は誰が考えたのか。開設当初の成り立ちはどうだったのか。

【事務局】かしわざきこども大学が開設されてから２０年あまり継続してきたが、担当課、担当者が移り変わってきた。開設当時の成り立ちやビジョンについて、事務局としても調べて確認をしたいと考えている。

【委員】　開設当初は、大変多くの資金があったと聞いている。一般的に大学は、長く続くことが前提であり、私立大学は資産運用している。基金は、収入減がなければ、使うほどなくなるのは当然であり、開設当初の成り立ちが一番重要である。

開設時に１０年間で子どもたちのために投資するという戦略であれば、それで良いはずであり、長く続けたいというビジョンがあったならば当初まとまったお金がある時点から運用してその運用益で事業運営していく方法もあったと思う。

外部のコンサルタントに事業を検証してもらい、より低コストで効果を生み出せるようなプログラムの見直しを行うことも必要と考える。柏崎で生まれ育った私たちよりも外から見た柏崎の良さを生かせるかもしれない。

【委員】　「かしわざきこども大学」創設当初のプランを知りたいと思っていた。私たちが話し合う内容としても、どっちへ進めばいいのか立ち止まらなくてはいけない時期になっている。寄附金ありきでやっていく事業なのか、寄附金がなくても持続可能な事業としてやっていくべきなのか。その場合、寄附金以外の収入源も考えていかなければならない。

現状、寄附金残高が減少している中で、事業継続のために、コスト削減や事業の縮小をしている。事業の縮小によって、子どもたちにたくさんの体験や感動を与えられなくなり、それに伴って参加者が減少し、ＰＲ力も乏しくなり、さらに事業が縮小し、寄附金も集まらなくなるという悪循環が予測できる。

寄附金があるうちに、頑張って１０年で終わりを迎えようという方向であれば、それに向けて使い方を考えていくべきであり、今後も持続していくのであれば、参加費は必ず徴収することや、寄附いただく企業と提携することが必要となると考える。

これから企業に働きかけて寄附をいただいたとしても、それが続くとは限らない。

事業を縮小しても、どのくらい続けられるのか分からない状況である。私たちの代でどちらに舵を切るのか決めた方が良いのではないか。

プロのコンサルタントに検証してもらうという意見もあったが、今後、持続可能な事業にしていくとシフトチェンジするのであれば、プロのコンサルタントに依頼するための資金やＰＲ活動に使われる資金は大事な投資になるのでそこに予算を使っていくことも必要と考える。

ホームページに関しては、写真などを入れてより分かりやすく見て楽しいものにしてもらいたいし、検索したらすぐにページにたどり着くようにしてもらいたい。チラシを見た人、実際に参加した人だけが存在を知っていて、恩恵を受ける人も限られている現状を払拭するような宣伝にしてもらいたい。

広報かしわざきのお知らせ記事でも事業の実施日時や内容、対象者だけの記載に留まっているので、「かしわざきこども大学」は年間通してこんな事業をやっている、こんな企業が参加してくれているということが伝わる内容にしてもらいたい。そうすることで幅広く周知が出来、その結果、認知度が高まり、保護者や企業等様々な所から参加したり寄附したりする効果が生まれれば、長く続けられる可能性が出てくると思う。

【委員】　実施報告書に、「かしわざきこども大学」の成り立ちや目指すものが記載してある。

開設当初から継続してきたのが「自然体験コース」であり、保育園、幼稚園等の園児の体験プログラム料を負担している。また、「学校教育活動推進事業」では柏崎市立全小中学校の教育活動で使われている。この２つの事業に多くの予算が配当されている。

基金残高が限られているので、現場の方々にも「かしわざきこども大学」としては、あと数年しか活動できないということを伝えた方が良いと考える。

【委員】　「かしわざきこども大学」の事業で、参加費を徴収しないというのは、何か理由があるのか。

【事務局】　参加費を徴収しないと定めている規定などは特にない。過去にロボット工作教室を実施した際には、材料費として参加費を徴収したこともある。

【委員】　これから企業に寄附金募集の働きかけをすると説明があったが、企業側へのメリットはあるのか。経営側としては、ただ寄附をくださいと言われても成り立たないと考える。何らかのネームバリュー、他社にアピールできるものは考えられているか。

【事務局】　過去には、柏崎日報での報道や長年継続して寄附いただいた企業には、柏崎市長からの感謝状の授与を行っている。

【委員】　企業側としては、円安、物価高騰に伴い経営も厳しい中にいるので、ただ「寄附だけ下さい。」では成り立たないと思う。「かしわざき子ども育成基金」に協力しているという賞状のようなものでも考えていかないといけないと思う。

寄附金ありきで実施してきた事業であり、原点に戻って今後どうしていくのか考えるべきである。子どもたちが将来に希望を持てる楽しい経験を一つでも残せるのであれば、有意義な事業であると思う。持続可能な事業にするためには、参加費をもらうということも必要だと思う。参加費を徴収することにして、参加者が減るようであれば、また次を考えるということをしても良いのではないか。漠然とした話を続けていても何も進まないので、具体的にやってみることが必要である。

【委員】　参加費を寄付金として収入できるか確認は必要である。

【委員】　事業費のうち半分を参加者から負担してもらえれば、単純に考えてあと５年のところがあと１０年に延びる。物価高騰が進んでいる中で、利用料が半分補助してもらえるだけでも助かる。例えば、プログラム利用料が４００円のところ、２００円こども大学から補助してもらえるだけでも負担は減る。あとは、利用者の選択によるところだと思う。

一方で、元々１億２０００万円を何年間で使い切りましょうという計画だったのであれば、それで良いと思う。

【委員】　企業からの寄附を募る時もそうだが、お互いにWin－Winの関係でないと長く続けることは難しい。多くの予算が振られている「自然体験コース」と「学校教育活動推進事業」を残して続けていくのか。半分負担してもらうというやり方を採用しつつすべてにおいて、寄附金を使って皆さんの活動を補助するという方向に変えるべきなのか。企業との連携を取りつつ、色々なアプローチをして企業がこんな取り組みをしているということを、市民が認識する機会を作れれば良いと思う。

【事務局】　「自然体験コース」の負担金については、プログラム料金の最低価格に合わせて設定している。過去には、園児一人あたり３００円だったが、プログラム料の改定に伴って４００円に増額した。当初の考え方では、プログラム料金の最低価格分は、「かしわざきこども大学」で負担するということだったと思われる。

5　連絡事項　　【事務局】

⑴ 今後のスケジュールについて

第３回運営協議会を来年２月中旬に開催予定である。内容は、令和８（２０２６）年度実施事業の報告を予定。

⑵ その他

本日の報酬と費用弁償については、１０月２１日（金）に振り込み予定。

⑶ 委員改選について

任期は２年間であるため、今年度末をもって終期を迎える。

改選に伴い、各団体に推薦依頼を行うとともに、公募委員については、広報かしわざき２月号で公募する予定になっている。

６　閉会　　山之内学校教育課長

活発な議論に感謝申し上げる。今後、どう舵を切るのか大変難しい問題である。変動性、不確実性、複雑性、曖昧性がある中で、議論の答えは一つではないと思う。

かしわざき子ども育成基金は、平成１２（２０００）年に市制６０周年記念事業の一つとして、子どもたちのために作られた基金である。どんな思いで、「かしわざきこども大学」の名称をつけたのか、創設当初の思いを探ってみたい。

事業に参加する子どもたちには、「大学は小学校や中学校と違って、自分の好きなこと、興味のあることをとことん勉強できるところである。自分の夢を膨らませる場所。今日は一日大学生です。」という趣旨の話をしている。

子どもたちには、実体験を通した学びが大切だと考えている。「かしわざきこども大学」は、今まさに岐路に立たされている。委員の皆様からご意見いただきながら、進むべき道を見極めていきたい。